# 第 9 回　ビゼーとオペラ「カルメン」①

## はじめに

今回は、2026 年と 2027 年の 2 年間に亘ってオペラ協会が取り組むオペラ『カルメン』とその作曲者ビゼーについての特集です。

ビゼーが作曲したオペラ『カルメン』は、今や世界中の歌劇場で人気の演目であり、そのお話を知らない人はあまりいないと思います。特に第 1 幕への前奏曲は、子どもにも大人気です。その他、『アルルの女』」やオペラ『真珠採り』の作曲者としてご存知の方もいるかと思います。

しかし、ビゼーの生涯については余り知られていないのではないでしょうか？実際、伝記本も他の有名な作曲家に比べても少ない気がします。

ということで、まずはビゼーの生涯について順を追って彼自身に語ってもらいましょう。

## 1 ビゼーの生涯

Bonjour！皆さん
私は 1838 年 10 月 25 日にフランスのパリで生まれました。生粋のパリっ子です。
日本ではちょうど江戸時代が終わる頃です。
父は声楽教師で母は優秀なピアニストでした。

## 幼少期のビゼー

一人っ子であったビゼーは、ピアニストであった母から記譜法やピアノを学び、早くから音楽への適性を見せていたそうです。

声楽教師であった父の教室の扉の外から聞き耳を立て、その記憶のみで難しい歌をいくつも歌えるようになり、さらに複雑な和声の構造を理解することもできるようになります。

息子の早熟さを目の当たりにして、野心的な両親は、わずか９歳のビゼーが音楽院で学ぶ十分な力があるとの自信を深めました。

こうして私は、わずか９歳で「パリ音楽院」に入学を許可されたのです。当時の音楽院の最小就学年齢は 10 歳でしたが、試験官にその規則を撤回させるほど私の音楽技術は高かったのです。すごいでしょう？正に天才少年だったのです。オッホン！

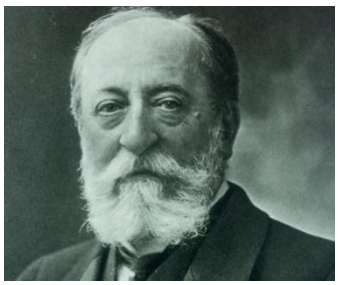
# 音楽院時代のビゼー

音楽院でもビゼーは早くから頭角を現し、わずか６か月のうちにソルフェージュで１等賞を取ってしまいます。この偉業に関心を持った前ピアノ科教授から対位法とフーガの個人教授を受けるようになり、そのレッスンを通じて「シャルル・グノー」と知り合います。

その後、ビゼーはグノーの音楽スタイルの影響を強く受けるようになります。

他にも、ビゼーはグノーの教え子のサン・サーンス（13 歳）とも出会っており、二人は固い友情で結ばれます。

シャルル・グノー



サン・サーンス

<u>音楽院時代初期のビゼーの作品</u>

〇2つの歌曲『Petite Marguerite』･『La rose et l’abeille』（1854 年）

〇序曲イ長調（1855 年）

〇交響曲ハ長調（1855 年）1935 年初演

※ビゼーはこの交響曲をなぜか出版せず、彼の死後埋もれていたが、1933 年に再発見され 1935 年に指揮者のワインガルトナーによって初演された。明るく爽やかで、いきいきとした曲調であるが、グノーの作品に大変似ていると言われている。

その後私は「ローマ大賞」
（奨学金付き留学制度）に挑戦して２度目
の 1857 年に見事賞を獲得。５年分の奨学金が
支給されました。やったぞ～！
そして、はじめの２年間はローマで、３年目は
ドイツ、そして残りの２年間はパリで過ごす計画で
ローマに旅立ったのです。

え、お前はだれかって？ローマ留学時代の
私ですよ。若いしイケメンでしょ？

## ローマ時代（1858 年～18860 年）のビゼー

ローマでの生活は、ビゼーにとって研鑽を積むのに理想的な環境でした。しかし人付き合いの気晴らしが過ぎ、この時期に書かれた作品は『テ・デウム』１作のみでした。しかも、この作品は宗教音楽コンクールにも落選し、ビゼーは落胆の余り宗教音楽は二度と書くまいと誓いを立ててしまいます。

このイタリアでの経験を基に、彼は新たな交響曲のスケッチを開始しますが、作曲の筆は遅々として進まず、ようやく 1868 年に完成したのが組曲『ローマ』です。この時期のビゼーは、野心的な構想を打ち立てながらも、すぐそれらを放棄するという傾向があったようです。

結局、1860 年にパリの母親が重病との報せが入り、彼は帰郷の途に就くことになります。

再びこの顔で登場！

帰郷後の 1861 年に、私はワーグナーの『タンホイザー』パリ初演を観劇し、彼に心酔しました。ワーグナーこそあらゆる存命作曲家を超えた存在だと確信しました。また、この頃リストの前で彼の難曲を初見で完璧に演奏し、「この難曲を克服できる人間は２人（リスト自身とハンス・フォン・ビューロー）だけだと思っていたが、３人いた。」と大絶賛されたのですが、私はピアニストとしての才能を隠し通しました。私にとっては、作曲こそが全てだったのです。

# パリ時代（1860年～1863 年）のビゼー

## この時代のビゼーの主な作品

〇スケルツォと葬送行進曲ヘ短調（1860 年～1861 年）

〇オペラ『真珠採り』（1862 年～1863 年）

※アレクサンドル・ヴァレフスキ侯爵の依頼で作曲した 3 幕ものの
オペラ　初演は 1863 年にリリック座劇団によって行われる。
聴衆の反応は芳しくなかったが、ベルリオーズに「ビゼー氏の
最大の名誉になる」と賞賛される。公演は 18 回で打ち切られ、
1886 年まで再演されなかった。

新しい顔で登場してみました。今までより格調高いでしょう？

さて、気が付くと、ローマ大賞の奨学金も途絶え、私は作曲だけでは食べていけなくなっていました。ピアノの弟子を取ったり、様々な舞台作品の練習ピアニストをしたりしました。さらには、編曲家としてジャンルを問わずあらゆる音楽の管弦楽編曲をこなしました。実はこの頃の無理がたたって、後年命を縮めることになってしまいました。

## ビゼーの結婚

ビゼーは、1869 年に師であったジャック・アレヴィの末娘ジュヌヴィエーヴと結婚し、一児を設けている。しかし、この結婚は必ずしも幸せなものではなかったようである。ジュヌヴィエーヴはビゼーの才能を理解せず、創作活動に批判的だったと言われている。夫の死後は息子を連れて別の男と結婚している。

彼女はビゼーの死後、彼の楽譜を大切に保管せず、散逸するにまかせたと伝えられている。この点で、モーツァルトの妻コンスタンツェが再婚後も夫の作品を大切に保管した例と対比され、これが、現在我々が目にするビゼーとモーツァルトの作品数の違いになったと考えられている。

## 『アルルの女』作曲の経緯

1872 年、ビゼーはアルフォンス・ドーデの戯曲『アルルの女』の劇付随音楽の作曲をパリのヴォードヴィル劇場から依頼された。

舞台が開幕すると、評論家には不評であったが、マスネらの勧めもあって、ビゼーは劇音楽を用いて４曲の組曲を制作した。これが現在の第１組曲である。この組曲は初演されると熱狂的に評価された。

もう一つの組曲は、ビゼーの死から４年後の 1879 年にギローによってまとめられて初演された。これが現在の『アルルの女』第２組曲として知られているものである。

※この後、ビゼーはいよいよオペラ『カルメン』の作曲に取り組む事になるが、それについては次号で詳しく取り上げたい。

## ビゼーの病と最期

ビゼーはもともと喉が弱かったようだが、ヘビースモーカーであり 1860 年代に編曲をこなすために 1 日 16 時間も働いたことが、知らぬ間にさらに健康を害することになったと言われている。

1868 年には気管に膿傷ができ、1874 年と 1875 年には喉の扁桃炎が基になり、深刻な発作を起こしている。その頃、オペラ『カルメン』の失敗も重なり、病状はなかなか回復しなかった。そしてついに、1875 年の結婚記念日６月３日の早朝に襲った発作により息を引き取った。享年 36 歳であった。彼の葬儀には、４，０００人を超える人々が参列したと言われている。

←ビゼーの墓の墓標
（パリ　ペールラシューズ墓地）

結局、この顔が一番落ち着きます。
皆さん、最後までご覧いただきありがとうございました。私の生涯はいかがでしたか？
わずか36歳でこの世を去ったことは、とても無念です。もっと作品をつくりたかった。
でも、私の一番の傑作『カルメン』が、今、世界中で公演されていると聞き、とても嬉しいです。これからも私の作品を愛していただければ幸いです。Au revoir！

**ビゼーとオペラ「カルメン」②につづく**